

就任のご挨拶

2003年4月8日
九後 太一

1 はじめに

お早うございます。昨日2003年4月7日は「鉄腕アトムの誕生した日」だったそうですが、奇しくも我が基礎物理学研究所も今年は50周年でして、一つの区切りの年であります。

今日、皆さんにわざわざお集まり頂きましたのは一つのことを皆さんと共有しておきたいと思ったからです。それは私の独創でも何でもなくて、ある意味何度も言い古されてきた常識的なことです。それは、この基礎物理学研究所の精神、大学で言えば「建学の精神」のようなものです。

私は今回初めて基研の所長となった新米なわけですが、もとよりそんなにはつきりしたヴィジョンがあるわけでもなく、強いリーダーシップの取れる人間でもありません。皆さんの暖かい励ましと寛容なご協力なしには何もできないだろうと思っています。そのために、「基研の開所精神」を今一度思い起こし、皆さんとそれを共有しておきたいと思うのです。

2 基研の開所精神

基研の精神とは何だろうかと考えますと、それは一般に言われています、「共同利用の精神」だと言えらると思います。共同利用といいましてもう言い古されていて何を今更、と思う方もいらっしゃると思いますが、我々はその精神を本当に深く認識しているか疑問だと思うのです。

特に昨今は、「top 30」ないしは名を改め「21世紀COEプログラム」、あるいは「国立大学法人化」などの、大学を巡る大きな流れの中で、大学間の競争、民活、効率化、が声高に叫ばれています。我々もこれらに対する書類作りに追われ、ともすればその動きに煽られて、無意識的にせよ、個別大学間の競争に邁進する意識構造になってしまっているのではないかと思います。最近私がはっとさせられた次の経験をお話しすることで、「共同利用の精神」をよりよくお伝えできるのではないかと思います。

基研はこの間、京大理学研究科の物理第1、物理第2、宇宙物理の3教室からなる物理学・宇宙物理学専攻、と一緒にあって「21世紀COEプログラム」にアプライしました。この間まで、私は物理学教室の教授だったわけで、その申請書類を物理教室側の人間として作成にたずさわった訳です。その時の文科省に提出しました「21世紀COEプログラム」への物理学・宇宙物理学専攻からの申請書類です。あの申請書類はあらかじめ学内の5名ほどの委員に予読され、コメントを受けたのです。その中の一人のコメントに私は深く感銘を受けました。今日はこれだけを皆さんに伝えたいのです。それはこう言っています。

1. すでに半世紀以上にわたり他分野に先駆けて、大学間どころか国家間の壁も乗り越えた共同研究を志向し輝かしい成果をあげてこられた基礎物理学

の分野で、いまさら「専攻・教室・研究所の間の壁を取り払う」ことを目的にされなければならないとは何とも寂しいことです ……(中略)……

2. とりわけ、国内・国際の共同研究協力のコアとしての役割を果たしてこられた基礎物理学研究所が、今になって個別大学間の、共同ではなく競争原理の渦中に身を投じ、一大学の拠点形成に加担されることは、研究所を共に育て享受されてきた全国の研究者から違和感を持たれることは必至であり、いささか矛盾を感じます。むしろ、その伝統的な特長と京都という地の利を生かして、基礎物理学研究所のみならず、専攻・教室まで一丸となって基礎物理学における新たなレベルの国内・国際共同研究・教育の先端的拠点を形成することを最大の売りにされるのも一案かと思えます。

この委員は、物理学分野が、そしてとりわけ基礎物理学研究所が、これまで「大学間どころか国家間の壁も乗り越えた共同研究を志向し輝かしい成果をあげて」きたこと、「国内・国際の共同研究協力のコアとしての役割を果たして」きたこと、を高く評価しているのです。そしてその基礎物理学研究所が「個別大学間の、共同ではなく競争原理の渦中に身を投じ、一大学の拠点形成に加担」することはおかしい、むしろ逆に、物理学・宇宙物理学専攻の3教室のほうこそが基礎物理学研究所にならって、大学間の卑小な競争というものを超えて「新たなレベルの国内・国際の共同研究・教育の先端的拠点を形成すること」をめざすべきだ、と言っているのです。

このコメントを読んだとき、この委員の見識に私はショックを受けました。本当にその通りです。「21世紀 COE プログラム」という、大学間で卑小な競争をさせるこのつまらないプログラムへの申請書にこそ、我々の学問本来の要求から発した国内・国際の共同研究という視点を高らかに謳うべきだ、という深い見識です。実は私は、この話を3月の物理学第2教室の教室発表会でしたのですが、そのときは物理学第二教室も基研同様これからこういう視点を持って行って欲しい、という点を強調しました。

しかし、翻って基礎物理学研究所自体を顧みたとき、果たしてこの委員が言ってくれているような「大学間どころか国家間の壁も乗り越えた共同研究を志向し輝かしい成果をあげて」きたこと、「国内・国際の共同研究協力のコアとしての役割を果たして」きたこと、などが現在でも立派に誇れる状態にあるのか、あるいはそれを支えてきた基研の共同利用の精神が正しく継承されているのか、という点は絶えず、点検・反省しなければなりません。新しく基研にやってきた若い人たちにはそれをいつも伝えねばなりませんし、我々のような古い人間もつい忘れがちになると思うのです。

3 事務スタッフの方々に

もちろんこのいわば抽象的な「基研の共同利用の精神」だけで全ての具体的方針が決まるわけでもありませんが、この思いを基研の事務方の人々から研究者まで全所員が共有していれば、最終的には皆で協力して基研を良い方向に持って行けるのではないかと思います。

まず、事務スタッフの方々に特に意識しておいて頂きたいのは、この共同利用の精神が言っているのは、基研が単に京大の研究所ではなく、「日本の基礎物理学研究所」であるという点です。皆さんのポジションは京都大学の職員ということですが、そんな狭い一大学の職員ではなく「日本の基礎物理学研究所」の職員であるという高い意識をもって欲しいと思うのです。日本全体の基礎物理学全体の発展・振興に我々は責任を持っているんだ、という意識です。

基研はすでに、例えば、原子核三者や物性の若手夏の学校を支援しています。これらは、通常の共同利用の研究会などと違って、基研がその開催に直接タッチしているものではありません。しかし、日本の基礎物理学の発展・振興という観点に立てばもちろん重要なアクティビティで、その意味から基研が長年にわたってずっと経済的、精神的に支援してきたわけです。若手の活動以外にも、例えば、坂東昌子さんがこの10年近く毎年行ってきました素粒子の宿泊滞在型の Summer Institute などの活動もあります。また、斯波先生が物性分野で行われた基研での滞在型の研究会もありました。ああいう企画について、それらが、基研の部員会で正式に認知されたものである可能性があるまいが、¹ そういうものの開催について協力を依頼されたら、積極的に支援するという姿勢をとって欲しいと思います。そうすることによって基研の活動の領域が広がってゆきますし、自ずとその存在意義も高くなるのだと思うのです。また、このような基研のミッションを自覚することは自分たちの仕事の誇りにもなるものだと思います。

4 研究スタッフの方々に

研究スタッフおよび学生・PDFの方々には、やはり、「良い研究をこの基研でする」ことを一番にお願いしたいと思います。「共同利用」というと何か他の大学の研究者へのサービス提供のような響きがありますが、そんなサービス提供という「容れ物」だけを考えていてもあまり実質の意味はありません。やはり、この基研で仕事が活発になされ良い研究成果が出ていることが一番重要で、それで、「是非、基研に行って仕事をしたい」と日本の研究者達に思ってもらい自ずと基研に多くの研究者が集まってくる、良い状況が生まれるのだと思います。

ですから、研究時間ができるだけ確保できるように、書類書きなどの administrative な仕事を皆さんに過度にお願いすることがないように、できるかぎりケアしたいと思います。もちろん、そういう書類作りなどを皆さんにやって頂くことは避けがたいことです。例えば、昨年も、21COE 申請や、組織替え、さらには法人化に向けての「中期目標・中期計画」ワークシート作成など、大変忙しかったと聞いております。それらはどうしても皆さんの協力が必要で仕方がない必要悪だと思います。ただ、できるだけ効率的にやるよう努力したいと思います。

矛盾するようですが、私は研究所は基本的には大学の学部などより「ひま」だと思っています。学部はやはり多くの学生・大学院生を育て教育するという業務

¹ 私はここで部員会で承認を受けない企画を奨励しているわけではありません。出来るだけ部員会に、あるいは所員を通じて随時、提案をして頂く方が良いのは決まっています。ここで言っているのは、そういう手続きを踏んでいないものでさえ、門前払いをしないで前向きに受け止めて欲しい、という所員側の、特に事務方の方々の姿勢の問題です。

があり、教務、入試などのそれに付随する行政的雑務がごまんとあり極めて多忙です。ですから、研究所のスタッフも「必要最小限」の雑務をして頂くのは当然の duty であるという認識もしておいてもらいたいと思うのです。もちろん、ここは学部と違って任期もありますから、学部と同じくらいにヘビーな雑務があればおかしいですが。そしてこの雑務の duty は、スタッフの間ではできるだけ公平に分けるよう、一部の人に偏らないよう注意したいと思います。この点についての皆さんのご協力をお願いします。公平といっても、セニアースタッフがより重く、助手の人は軽く、というのはもちろんです。

所内のいろんな委員会委員のアサインも見直しが必要ですが、未だその性格がよく把握できない状態ですので、7月までは基本的に今のままで行きたいと思います。もう少し様子がわかってから、duty の公平性や適材適所の観点から考え直したいと思います。

それから基本的には、毎日研究所にきて、基研のここで研究をやって頂きたいと思います。過度に、自宅にこもるとか、外国出張ばかりとかいうのでは、基研のこの場が皆が滞在したい活発な研究の場にならないことになってしまいます。

ここでつまらないかもしれないですが、各部屋のドアについています「バネ」を外すことを提案します。人により、部屋のドアを開け放っている人もいますが、多くは閉まっています。そして外部から人がこの基研を来訪し、4階や5階に行きますと廊下の両側がズラッとドアが閉まっていて暗く、訪問者を冷たく拒絶しているようです。やはり、ドアが開いていないとわざわざノックしてまで入ろうという気になるのは余程はっきりした用事があるときしかありません。やはり、活発な雰囲気を作るにはまず、必要な場合以外は基本的には部屋のドアを開けておく、というのをデフォルトにすべきだと思うのです。Fermi Lab では、全てガラス張りで居眠りもできないとか、SLAC には確か、部屋のドアがなかったような記憶があります。CERN はドアはついてましたが、バネはなく、おおむね開いていたように思います。

最後になりましたが、基研の活発化のためのいろんなアイデアもご提案下さい。この間は、今素粒子の研究者でやっている金曜日の昼食会を全分野でやろうということをお話していました。それから各所員のホームページを整備しようとか、いろいろあります。それに今年は50周年記念シンポジウムを開かねばなりません。この組織委員会も近く立ち上げ、シンポジウムで基研の過去と現在を検証し、将来像を探る貴重な機会としたいと思います。